

就職内定の4年生からアドバイス

「なぜその選択、行動か」

自己分析から見える就活の軸

「就活を考えない時間も作る」

「仲間と一緒に頑張る」

女性白門会、キャリアセンターが「女子学生応援セミナー」



内定者のパネルディスカッションに参加した小川智香さん、平栗麻衣さん、高見澤琴夏さんの4年生3人(写真左から)▲

これから就職活動に臨む女子学生の支援を目的とした第28回WINGの会「女子学生応援セミナー」が2022年11月26日、多摩キャンパス「FOREST GATEWAY CHUO」410教室を主会場に、対面とオンラインのハイブリッド形式で開かれた。卒業生でつくる学会会の女性支部「女性白門会」と中央大学キャリアセンターが共催した。

企業や官庁に内定した4年生の女子学生3人によるパネルディスカッション、学生との質疑応答や、法学部OGで読売新聞東京本社政治部記者の森藤千恵さんの「自分らしい働き方を考えよう」と題した講演があり、参加者41人(対面17人、オンライン24人)が熱心に耳を傾けた。

学生記者 谷井花蓮(総合政策2)

質疑応答の中で、就活で大切にしてきた「軸」を尋ねられた文学部4年の高見澤琴夏さん(デンソー内定)は、「オンリーワンの実力のある会社で、“チーム感”をもって仕事ができるかどうか」と回答。商学部4年の小川智香さん(三井住友銀行内定)は「事業規模の大きな会社で、人と関わってする仕事をしたい」、総合政策学部4年の平栗麻衣さん(個人情報保護委員会=国家公務員一般職=内定)は「結婚して子供を産み、かつ生涯働き続けることができるかなう仕事」とそれぞれ答えた。

高見澤さんは大学3年の頃から

これまで、「なぜその選択をしたか、行動をしたか」を問い直す過程で軸が見えてきたと語り、自己分析の大切さも強調した。3人とも自身の求める方向性が、採用する側とマッチしていたといえそうだ。

「面接はマッチング」 「あせらず時間をかけて 将来を考えて」

学生時代の経験について、3人は「打ち込めることはとことん打ち込んだほうがいい」と口をそろえ、平栗さんは「市役所系(の面接で)はボラン

ティア経験を尋ねられることがある」とアドバイスした。

高見澤さんは「面接はマッチング」と思って臨んだ。1、2年生のうちに頑張ったことは結果として就活にもつながる」と後輩たちにメッセージを送り、小川さんは「就活を考えない時間を持つことも大切。あせらず時間をかけて将来を考えてほしい」と訴えた。平栗さんは「公務員を目指す仲間のつながりを作り、一緒に頑張ることも大事。努力も必要だが、運と縁という考え方もある」と呼びかけた。

第28回WINGの会 「女子学生応援セミナー」

〈日 時〉2022年11月26日(土)14:00~16:50

〈場 所〉多摩キャンパス
「FOREST GATEWAY CHUO」410教室を会場に
オンラインとのハイブリッド開催



対面とオンラインのハイブリッド形式で▲
開かれたセミナー

【第1部】中央大学OGによる講演会「自分らしい働き方を考えよう」

登壇者:読売新聞東京本社勤務 森藤千恵さん

【略歴】中央大学法学部政治学科卒業。2003年読売新聞東京本社に入社。長野支局、世論調査部を経て2009年に政治部に異動。首相官邸クラブや外務省などを担当し、現在は与党を担当する「平河クラブ」サブキャップを務める。

【第2部】内定者パネルディスカッション

「今、知りたい就活のリアル!~就活経験者が語る本音の60分~」

〈パネリスト〉



商学部4年
小川智香さん
(三井住友銀行内定)



文学部4年
高見澤琴夏さん
(デンソー内定)



総合政策学部4年
平栗麻衣さん
(個人情報保護委員会=国家公務員一般職=内定)

〈共催〉中央大学キャリアセンター 中央大学学生会女性白門会

セミナーに参加した「HAKUMON Chuo」学生記者が、印象に残った言葉や感じ取ったこと、学んだことなどを報告します。

【取材後記】

「私はどんな働き方をしたいのか」 「自分を深く知りたい」



学生記者 谷井花蓮 (総合政策2)

就職活動に不安を感じている私にとって、今回のセミナーはとても有益なものでした。

第1部で、読売新聞東京本社政治部で活躍する法学部OGの森藤千恵さんの講演を聞き、就職活動で最も重要なことは「自分を知る」ということだと感じました。「自分を知る」ことが、自分に合った仕事を見つけることにつながります。森藤さんは学生時代に好きなこと150項目を紙に書き、そこから将来やりたいことを考えたといいます。

講演でのお話から、自分を知るためにも、さまざまなことに挑戦し、多様な価値観に触れることが大事だと気づかされました。具体的には、いろいろな場所を訪れ、多くの人に会うことが自己を知るきっかけになり、自由な時間がある学生のうちに積極的に行動し、価値観を広げることを勧められました。

第2部では、実際に就活を経験した4年生3人から具体的な話を聞き、将来の仕事を選択する際に重要なことが何かを知りました。特に印

象に残っているのは個人情報保護委員会(国家公務員一般職)に内定された総合政策学部4年の平栗麻衣さんの行動力です。

就活に欠かせない 行動力

自分が望む条件を満たした就職先を見つけるには、行動力が欠かせません。その上で、平栗さんは女性が働く上での環境や制度を重視されていました。男女の就職率や職種の違いがないかを情報収集し、女性活躍推進に関するデータベースを通して制度が整っている組織や企業を絞っていました。

さらに、男性育休取得率に関する質問を担当者に直接投げかけ、中大OB、OGに育休を取得した際の周囲の反応や様子などを尋ねたといいます。こうした積極的な行動力が、自分に合った就職先を見つけることに結び付けました。

3人が就職先を決めたそれぞれの理由は違います。しかし、就活に際

して何を重視し、大切にするかという「自分の軸」は無理やり決めたのではなく、考えを深めるにつれて決まってきたということが共通していました。

これまでの自分を顧みるライフラインチャートを作ったり、他者からみた自分の姿を尋ねたり、企業のエントリーシートを書いたりすることが、将来について考える良い機会になったといいます。現在、「自分の軸」が決まっていないからといって、必ずしも不安を感じる必要はなく、じっくりと決めていきたいと私は感じています。

セミナーで具体的な就活の流れや取り組む姿勢など全般を把握し、卒業後の将来のために「今を一生懸命に生きることが大切だ」とも実感できました。森藤さんは「就活(面接)は自分の価値への評価ではなくマッチング」と話されました。

私は「自分を深く知る」ということがまだ十分ではありません。これを機にどんな働き方をしたいのか、働く上での条件の優先順位は何なのかなどのキャリアプランを意識しようと考え始めています。

女性白門会

女性白門会はさまざまな分野で活躍する女性の中央大学卒業生の会。「WINGの会」は女性OGから現役学生に対する進路・就職活動への応援を目的に発足した。学生にとって、女性のキャリア形成が一層多様化し、自分のキャリアをどのように描き、進路をどう考えていくかが喫緊の課題となる中で、今回のセミナーは28回目の開催となった。

学生時代「いろいろな場所で、 いろいろな人に会い、いろいろな体験を」

法学部OG・読売新聞政治部記者 森藤千恵さんが講演



講演した法学部OGの森藤千恵さんは2003年に読売新聞東京本社に入社。政治部に在籍する現在は、記者クラブの「平河クラブ」で主に政権与党を担当し、自身の取材とともに現場の「サブキャップ」として後輩への取材指示、原稿チェックなどの業務を精力的に行う日々を過ごしている。

講演では、自身の学生時代を振り返り、①好きなことの中から将来やりたいことを見つける②ウイング（人としての幅）を広げるため3つのことを同時にこなす③「努力は裏切らない」ではなく、「正しい方向でなされた努力は裏切らない」という3点を心がけていたと強調した。

具体的には、①の好きなこと、やりたいことを書き出すと、「文章を書く」「分析する」「インテリア」「建

築」など約150項目が挙がったという。②の「3つのこと」は、サークル活動と国会議員事務所でのインターンシップ(アルバイト)、予備校での国家公務員試験の勉強と説明し、③の意味は「自分に向いていることは何か」「自分が役に立てる道は何か」という正しい方向性を考えるべきだと問いかけた。

「ウイングを広げる」 「就活は自分を知る チャンス」

自己分析と、「人から自分がどう見えるか」という他己分析により、自分の良いところを認識、把握できるため、「就活は自分自身を知る良いチャンス」とも訴えた森藤さん。「面接は自分の価値への評価ではなく

マッチング。エントリーシート記入の際は、自身の幅の広さや『私はこんな良さもある』という意外性を伝えられるように意識した」と強調した。

実際に、特技の欄に「水泳」と書くのではなく、「腕立て伏せ」「腹筋運動」と記した。「なぜ？」と尋ねる面接担当者として、水泳のことに話題が広がっていった。面接で聞いてほしいことを意識して記入するテクニックも大事というエピソードだ。

後輩の女子学生たちに「具体的なエピソードの引き出しを持つことが(面接担当者の)印象に残る。学生時代にいろいろな場所に行き、いろいろな人に会い、いろいろな体験をする。エントリーシートを埋める事柄がたくさんある大学時代を送ってほしい」とメッセージを送った。



示唆に富んだ森藤さんの講演に学生たちが聞き入った＝2022年11月26日、多摩キャンパス「FOREST GATEWAY CHUO」410教室▲



4人の心を一つに 「スタートから攻め続ける」

漕艇部 インカレ女子クォドルプルで初優勝

クルー(選手)の多くが座った向きと反対方向に艇が進むボート競技は、顔に当たる向かい風が順風となる。リードを広げて先頭に立てば、ライバルの艇すべてが視界に入ってくる。「勝っている。引き離れた!」。その瞬間、視覚的な達成感を得られるという。



▲インカレ女子クォドルプルの優勝メンバー。
(左から)上野美歩選手、橋村心選手、
溝口心華選手、神杏奈選手

漕艇部(ボート部)が2022年9月の第49回全日本大学選手権大会(インカレ)の女子クォドルプルで初優勝した。終盤も艇の推進力が落ちないという持ち味に加え、「スタートから攻めていくレース展開にしよう」とクルー4人が心を一つにして挑んだことが栄冠を引き寄せた。優勝メンバーのうち、溝口心華選手(文4)、橋村心選手(文3)の2人に、埼玉県戸田市の漕艇部合宿所で話を聞いた。

優勝したのは、溝口選手、橋村選手に、神杏奈選手(商3)、上野美歩選手(法2)を加えた4人。クォドルプルは漕ぎ手が4人の種目で、インカレで2020年からは舵手(コックス)のいない「舵手なしクォドルプル」として実施されている。チームの主力の女子選手でメンバーが構成され、男子にたとえば花形のエイトに相当するという。

オールを漕ぐ回数を上げる!

レース中、最も船首近くに座る舳

手(じくしゅ、バウ)の溝口選手、船尾に乗るストロークの上野選手の足元には、1分間にオールを漕ぐ回数が表示されるGPS機能付きの機材が積まれていた。

「ほかの大学も負けられないとスタートから攻めてくる」と決勝のレース展開を読み、終盤もペースが落ちない強みに加えて「回数をいつもより上げて、最初から攻め続ける」と4人の気持ちが一つになった。

いつもより約4回多くした42回でスタートし、徐々に37、38回程程度に落としていく。それでも通常よりは多い回数だ。中大は終盤に巻き返して



優勝の瞬間、艇上で喜ぶ4選手(写真奥のボート)▲

勝利する展開が多いが、インカレという大一番で強気の戦法に出た格好となった。当たり前だが、回転数を上げれば上げるほど、負担は増し、身体は悲鳴を上げる。しかしー。

「身体はスピードを感じなかった。それでも艇は速かった。練習の成果だと思います」と、橋村選手は胸を張った。漕ぐ回数を上げる練習の積み重ねが、好結果を生んだ。終始リードを保ち、ラスト250メートルでライバル艇(仙台大)がペースを上げてきたが、差は縮まらず、最後は突き放した。

仲間の喜ぶ姿、 歓喜の声に勝利を実感

前年のインカレ女子クォドルプルは、ほぼ変わらないメンバーで挑んで4位だった。橋村選手は「前年は悔しさ、不甲斐なさを感じた。やっと勝てた」と達成感を口にした。前に座る上野選手の喜ぶ姿、後ろの神選手の歓喜の声で勝利を実感した

という。

最終学年で優勝を飾った溝口選手は高校時代、インターハイのシングルスカルに出場し、決勝で自身のミスが原因で涙をのんだ。その思いを晴らそうと大学でも競技を続けたことが最後に実を結んだ。「時間を置いて実感がわいてきた。4年間の努力が実って本当によかった」と振り返る。

「皆の姿が見えるバウは艇のスピードをさほど感じないポジション」と、溝口選手はたとえる。しかし、決勝では「進んでいる」という感覚を身をもって味わった。大学4年間の競技生活でも2、3回しか感じなかった推進力だったという。「やり切った。悔いはありません」とも語り、卒業して社会人となった後はボート競技の第一線から退くつもりだ。

インカレ連覇へ 「努力惜しまない」

4年生が引退して新たに女子主

将となった橋村選手は、「2023年のインカレ連覇に向けてチームを引っ張っていきたい。努力は惜しみません」と決意を語り、「メンバーの選考も白紙の状態からです」と実力主義を掲げる。

実は橋村選手と溝口選手は、埼玉県の別の高校でボート競技に励み、国体ではダブルスカルのチームメートにもなった。橋村選手は「艇を安定して進ませるテクニックなど、(溝口)心華さんから盗めるものはないかといつも見ていた。中大に進んだのも心華さんがいたからです」と先輩に感謝する。

ボート中心の生活を送ってきた2人は「練習はつらい」と口をそろえたが、それでもボートを続けてきた。「なぜだろう？」と互いの顔を見つめて笑い合ったが、橋村選手は取材の最後にこう語った。

「あんなにつらいと思っていた練習。なのに、けがをして練習できないと練習をしたくてしたくてたまらなくなるんです」



ボート競技

1人が1本のオールで艇の左右どちらかを漕ぐ「スイープ」、1人が2本のオールを左右対称に漕ぐ「スカル」に分けられ、1人漕ぎ(シングル)、2人漕ぎ(ダブル・ペア)、4人漕ぎ(クォドルプル・フォア)、8人漕ぎ(エイト)の種目がある。

艇上で舵取り役となる舵手(コックス)がいる種目と、いない種目の違いもある。クォドルプルの艇のサイズは長さ11.5メートル程度、幅42センチ程度。重さは52キロ以上という規定がある。

全日本大学選手権大会女子クォドルプル 優勝メンバー

溝口心華選手

みぞぐち・しすか。埼玉・浦和商高卒、文学部4年。身長166センチ。手足が長いほうが有利なボート選手としては小柄だという。けがに悩まされた大学1、3年の時期は懸垂運動などで体幹を鍛えた。ボート部の溝口健太監督は父。1歳上の姉も中大ボート部というボート一家。

橋村心選手

はしむら・しん。埼玉・南稜高卒、文学部3年。身長173センチ。練習で培った持久力に自信がある。最後までバテないのが強み。日常の感覚にない、水の上をすいすいと進む心地よさにボートの魅力を感じている。

神杏奈選手

じん・あんな。福島・田村高卒、商学部3年。身長170センチ。集中力と修正能力に自信がある。1年生の頃から、課題だったフィジカル強化に注力した。中央大学の学生主体の雰囲気はひかれ、入部を決めた。

上野美歩選手

うえの・みほ。東京・成立学園高卒、法学部2年。身長170センチ。中学1年生からボート競技を始めた。高校生時代はJOCエリートアカデミーに所属。世界ジュニア選手権大会出場。アジアジュニア選手権大会女子シングルスカル2位。



(左から)溝口心華選手、神杏奈選手、橋村心選手、上野美歩選手

第49回全日本大学選手権大会 女子クォドルプル決勝

(2022年9月11日、埼玉県戸田市・戸田ボートコース)

	500m	1000m	1500m	2000m (Finish)
①中央大	1:46.64	3:35.54	5:24.08	7:08.47
②仙台大	1:47.86	3:36.86	5:25.29	7:10.31
③明治大	1:46.47	3:36.63	5:26.22	7:10.42
④早稲田大	1:49.13	3:38.26	5:28.00	7:17.97
⑤立命館大	1:49.45	3:42.59	5:35.11	7:23.02
⑥大阪大	1:57.10	3:59.08	5:59.84	7:59.04

(日本ボート協会ホームページから)



☆中央大学学友会体育連盟漕艇部

1951年創部。溝口健太監督、白石悠主将。1954年の全日本選手権舵手付きフォアで初優勝。1983年にエイト種目で全日本大学選手権と全日本選手権に初優勝。これまでに全日本選手権エイト優勝が5回、全日本大学選手権エイト優勝は14回を数える。オリンピックには9大会で延べ26選手を輩出する学生ボート界の名門。女子部は2016年に創設された。

現在の部員は選手22人(男子14人、女子8人)、マネージャー10人。埼玉県戸田市の戸田ボートコース沿いに艇庫、合宿所があり、選手たちは授業日には各キャンパスにここから通学する。

念願の「府立」制覇



拳法部

全日本学生選手権男子団体で 12年ぶり3度目の栄冠

学生記者 芳賀葵(法3)

拳法部が、2022年12月の第67回全日本学生拳法選手権大会(男子団体)で12年ぶり3度目の優勝を飾った。最優秀選手賞に選ばれた横井竜太主将(法4)は「先輩方が達成できなかった『府立』で優勝し、信じられない思いです」と振り返る。試合会場のエディオンアリーナ大阪(大阪府立体育会館)の名前から通称「府立」といわれ、拳法部が一番の目標に掲げている大会。学生日本一を成し遂げた横井主将と、チームの柱の一人として奮闘した倉田要選手(文2)に勝因、今後の目標などを聞いた。

■日本拳法(拳法)

面と胴、グローブ、股当てなどの防具を装着し、こぶしと蹴りの打撃技と、投げ技、寝技で戦う武道。体重別の階級はない。ボクシング、キックボクシングなどにも選手を輩出している。中央大学拳法部はマネージャーを含む男女27人(2022年度)が在籍している。



決勝戦での横井主将の勇姿▲

準決勝の関西大戦。実力者でチームメイトからの信頼も厚い次鋒の竹原照真選手(経済1)が敗れ、中大が得意とする先手必勝の流れが途切れた。にわか暗雲がチームを覆ったが、すぐに三鋒の松村隼佑選手(経済4)が勝ち、流れを引き戻して難敵を撃破。決勝戦は、横井主将が「倉田の先鋒戦が勝敗を分けた」とたとえた通り、倉田選手の活躍もあって先手必勝を貫き、学生日本一を達成した。

先鋒、次鋒、三鋒、中堅、三将、副将、大将という7人で戦う「府立」は、仲間同士が互いに互いを補い合えるかを含めたチームの底力が

試されたといえる。府立の表彰セレモニーでは校歌が流れるが、横井主将ら多くの選手が目目を赤くしながら斉唱した。

チームの「底力」出し切る 練習量3倍 「目の色変えて打ち込む」

府立の2カ月前の東日本大学トーナメント戦で、明治大に惨敗を喫し、練習量を3倍に増やした。実戦練習を多く取り入れ、その上で各自が自主練習に取り組むなど、「目の色を変えて打ち込んだ。府立には自信満々で臨んだ」(横井主将)と

いう。前年の府立準決勝でも敗れた明治大が準々決勝で関西学院大に敗北し、直接対決での雪辱を果たせなかったものの、12年ぶりの栄冠をつかんだ。

倉田選手は、横井主将と同じ拳法道場で幼少期からともに練習に取り組み、中大にも横井主将を慕って進学したという。「先輩たちとの最後の試合。優勝はうれしかった」と語り、今後は中大の府立連覇と、個人では日本拳法総合選手権(一般の部)で結果を残すのが目標。横井主将は卒業後も社会人として競技を続けるつもりだ。

編集後記

拳法に打ち込む2人の深い絆

学生記者 芳賀葵(法3)

横井竜太主将と倉田要選手は地元が同じ三重県で、幼少期から通っていた拳法道場も同じだった。仲の良さが取材を通して垣間見えた。高校生の倉田選手が出場した大会会場で、横井主将が駆け付けて応援したこともあるそうだ。横井主将の母校の選手が対戦相手でも、倉田選手にアドバイスの声をかけていたという。

今の拳法部の強さの秘密を尋ねると、2人は「部員の仲の良さ」と口をそろえた。拳法部にはスポーツ推薦組、一般組の両方の選手が所属している。「大学で拳法を始めた選手と、拳法歴の長い選手で個人差があり、難しい面もあるのでは?」と問いかけると、倉田選手は「サッカーや柔道など他のスポーツの経験者から教わる練習法が拳法にも役立つし、チームに活気を与えてくれている」と答え、横井主将も「スポーツ推薦の選手だけで良いチームはできない。一般生に感謝している」と話した。プライベートや学業で一般生に助けられている面も少なくないという。

取材で特に印象的だったのは、コロナ禍で部員のモチベーションが下がっていた頃、倉田選手が部員に電話をして、「拳法を続けよう」と励まし合ったというエピソードだ。仲間を大切にしていることがよく分かった。

横井主将は、「主将として誰よりも強くあること」を意識していると語った。拳法の技量だけでなく、精神的にも自分が一番強いと思うようにしているという。強い主将の存在があったからこそ、今回の全日本学生選手権でも栄冠を勝ち取れたのだと感じた。また、横井主将は、両親への感謝の言葉を度々口にした。三重の実家から毎回大会を見に来てくれる両親に、学生最後の大会で優勝する姿を見せられたことが、本当にうれしそうだった。

倉田選手は、そんな横井主将の姿を目標としている。幼いころから同じ道場で練習に励んだ2人が、同じ中央大学の拳法部で活躍する姿は輝いて見える。

拳法を通して培った2人の絆を感じた取材だった。

◇第67回全日本学生拳法選手権大会 成績 (2022年12月11日、大阪・エディオンアリーナ大阪)

▽1回戦	中央大	6-0	大阪公立大
▽2回戦	中央大	6-1	関東学院大
▽準々決勝	中央大	6-0	京都産業大
▽準決勝	中央大	4-3	関西大
▽決勝	中央大	5-2	関西学院大

(学生拳法連盟ホームページより抜粋)

☆第67回全日本学生拳法選手権大会 中大拳法部メンバー

先鋒	倉田 要 (文2)	170センチ・100キロ
次鋒	竹原 照真 (経済1)	169センチ・70キロ
三鋒	松村 隼佑 (経済4)	166センチ・68キロ
中堅	広兼 蓮 (商3)	175センチ・75キロ
三将	松本 鼓大 (商1)	180センチ・75キロ
副将	田中 創大 (商3)	173センチ・76キロ
大将	横井 竜太 (法4)	176センチ・83キロ

※準決勝は、横井選手が副将、田中選手が大将で出場

コミュニケーション力を磨く
感謝の心、利他の精神を高め、
キャディーを務めたプロ選手が国内ツアー初制覇

ゴルフ部
牛谷陸選手(商4)



牛谷陸選手(左)がキャディーとして大西魁斗プロを支えた ©ALBA

キャディーとして勝利の瞬間は覚えていない。2メートルのウイニングパットが決まると、頭が真っ白になり、心が激しく揺れ動いた。ギャラリーの歓声でわれに返り、初めて優勝に貢献できたと実感したという。

2022年9月のフジサンケイクラシック(山梨・富士桜カントリー倶楽部)で、新進気鋭の大西^{かいと}魁斗プロ(24)が国内ツアー初優勝を飾った。実は4日間のラウンドでキャディーを任されたのが中央大学ゴルフ部の牛谷陸選手(商4)。初対面でのラウンドだったが、「陸君のおかげでいいリズムでプレーできた」と大西プロから感謝された。

「大きな舞台で経験を積めたことへの感謝、誰かのために尽くす利他の精神、そしてコミュニケーションの大切さ」。3つの糧を得た貴重な経験を胸に、牛谷選手は卒業の日を迎えた。



▲フジサンケイクラシックの18番ホールのフラッグを手にする牛谷陸選手。大西魁斗プロのサイン入りだ

「こんなに思い通りにいかないスポーツはない」とのめり込む

牛谷陸選手

うしたに・りく。大阪・明星高卒、商学部4年。ベストスコアは69。高校時代は硬式野球部でポジションはセカンド。大学入学前、ゴルフ好きの両親の影響で初めてゴルフクラブを握った。さまざまな種類のクラブがあり、攻略法はコースによって異なる。「まさに考えるスポーツ。そして、こんなに思い通りにいかないスポーツはない」と複雑さにのめり込み、中大ゴルフ部に入部した。好きな言葉「初志貫徹」は父から教えられ、野球のグラブにも縫い付けていた。

「大役」ゴルフ部 先輩から舞い込む

国内19戦目だった大西プロのキャディーの話は、プロゴルファーを目指している2学年上の中大ゴルフ部OB、朝倉駿選手から舞い込んだ。大西プロと朝倉選手は同学年の幼なじみ。朝倉選手のプロテストの時期が、キャディーを務める予定だったフジサンケイクラシックと重なり、「自他ともに認める、誰とでも仲良くなれる朗らかな人柄、性格」という牛谷選手が抜てきされた。

キャディー経験はプロアマトーナメントでアマチュアを担当した大学3年時の一度だけだったが、「めったにない貴重な機会」と捉えてチャレンジした。キャディーとして大事なのは、風を読むこと、飛距離の測定、そしてプレーヤーがいかにか気分よくラウンドしてもらえるかに心を配ること。和やかな雰囲気でもコースを回れるよう、競技と関係のない世間話や他愛のない会話を常に意識したという。

そんなラウンド中の“空気”を表す話を牛谷選手が教えてくれた。

「超過料金ですね」に笑顔 ベストショット引き出す

試合は4日間、72ホールで決着がつかず、同スコアで韓国の選手と並んだ。誰もが緊張するプレーオフの1ホール目、ティーグラウンドの大西プロに「超過料金ですね」と声をかけた。プレーオフに伴ってキャディーのアルバイト代も時間延長ですねというジョークだったが、大西プロも「そうだね」と笑ってうなずいた。

するとー。290ヤードのバンカーを越え、300ヤード以上のロングドライブという4日間でも最良のショットが飛び出した。このホールで大西プロがバーディーを奪い勝負は決着した。大西プロの普段通りの力を引き出したことに、牛谷選手のキャディーとしての力量、コミュニケーション力が一役買ったといえるエピソードだ。

大西プロからはこの後、賞金ラン

ク上位者か、その年のツアー優勝者しか出場が許されないJTカップを含む2試合の国内ツアーのキャディーにも指名された。

「挑戦の気持ち」 常に忘れず

オン・オフのけじめがはっきりとしたゴルフ部では4年間、集中して競技に打ち込んだ。大学4年秋に初めてレギュラー入りを果たしたのも、牛谷選手が真剣にゴルフと向き合ってきたからこそだろう。そして今回のキャディー経験は、4年間の努力の積み重ねに対する大きなプレゼントだったようにも思える。

「大西プロや朝倉先輩に感謝の気持ちしかありません。大西プロのように常に挑戦する気持ちを忘れずに社会人として歩んでいきたい。ゴルフはトップアマを目指します」

卒業後はIT業界に進む。ゴルフ部の仲間や他の卒業生にも「挑戦する気持ち」をエールとして送りたいという。

第50回フジサンケイクラシック

(2022年9月1～4日、山梨県富士河口湖町・富士桜カントリー倶楽部)

順位	氏名	スコア	通算
1	大西 魁斗	-11	273 (67、70、68、68)
2	パク・サンヒョン	-11	273 (68、67、67、71)
3	岩田 寛	-10	274 (68、69、67、70)

※ 1、2位はプレーオフによる

牛谷陸選手(左)と大西魁斗プロ ©ALBA▶



「2けたゴールを奪う」 「チームの昇格に貢献」 「スタメン定着」

サッカー部 Jリーグ内定の3選手が会見



今春からJリーグ入りする3選手。左から平尾拳士朗選手、豊田歩選手、荒木遼太選手▲

サッカー部は2022年12月22日に記者会見を開き、Jリーグのチームに入団が内定した3選手を発表した。会見に臨んだのはFC琉球に入団が内定した荒木遼太選手(経済4)、ロアッソ熊本に内定の豊田歩選手(総合政策4)、藤枝MYFCに入団する平尾拳士朗選手(経済4)。3人はそれぞれに抱負と意気込みを語った後、2023年春から所属するチームのユニフォームに袖を通し、笑顔で記念撮影に応じた。

会見には加納樹里部長、宮沢正史監督も同席。宮沢監督は、荒木選手について「技術があり強気なプレーが持ち味」、豊田選手は「左足からのキックが大きな魅力」、平尾選手には「独特のタッチとリズムのドリブルが素晴らしい」と語り、今後の活躍にエールを送っていた。

3選手略歴

名前	学部	ポジション	身長・体重	内定先チーム
荒木 遼太	経済4年	DF	172センチ・69キロ	FC琉球
豊田 歩	総合政策4年	MF	171センチ・67キロ	ロアッソ熊本
平尾 拳士朗	経済4年	MF/FW	172センチ・63キロ	藤枝MYFC



荒木遼太選手(経済4)

FC琉球内定

「1シーズン目からスタメンに定着し、チームのJ2昇格に貢献したい。(筑波大出身で日本代表の)三笥薫選手とは、僕が大学1年のとき試合でマッチアップした経験がある。三笥選手のW杯での活躍を見て、僕もあの舞台に立ちたいと思いました」



豊田歩選手(総合政策4)

ロアッソ熊本内定

「左足からのパス、パスワークや関係プレーが自分の魅力。チームのJ1昇格に貢献したい。サッカー部ではプレーだけでなく、(チームにフロント制が導入されて)事業本部で企画を担当し、楽しく活動できた」



平尾拳士朗選手(経済4)

藤枝MYFC内定

「開幕からスタメンで出場し、1年を通して2けたゴールを奪いたい。ドリブルと運動量の豊富さが自分のアピールポイント。次の

W杯を目指して活躍していきたい」